

実践報告「英語嫌い」に英語の勉強をさせる方法（その4）

堀内 ちとせ

1. はじめに

英語が専門でなく、それほど得意でもない学生が、少しでも頻繁に英語に触れられるような授業形態を、藤田保健衛生大学、衛生学部、衛生技術学科1年の下級クラス（習熟度別）41名（2004年度後期）の「読解の授業」を対象に検討する。

2. 方法

以下の要領で授業を進め、③～⑤を毎週、繰り返す。

- ①専門が「医療関係」であるため、できるだけ学生の興味を引きそうな、「健康科学系の教科書」を使用する。また、長めの文章ばかりが載っているものを避け、「短めの文章」がいくつか載っているタイプのものを選ぶ。
- ②授業の第1回目に、学生自身が読みたいと思う文章を教科書から3つ選ばせ、その「学生の希望」の集計に基づいて授業を進める。
- ③担当クラスが、習熟度別の下級クラスであるため、「解説」を行う前の週に、本文の内容を少しでも理解しやすくするための「予習プリント」を配布し、「予習」代わりに自宅で各自行わせる。「予習プリント」とは、本文の内容について、殆ど1文ごとに細かく内容を問うような形式のものである。それを一通り行えば、本文に一通り目を通すことができる。また、何か「疑問点」がある場合は、「疑問点」も書き出して来させる。「予習プリント」及び「疑問点の書き出し」は、「解説」の授業後に提出させ、「評価」の一環とする。「予習プリント」では、「正誤」等、「質」的なものは問わず、「試みた」ということ自体を「努力点」として評価する。また、「予習プリント」とは別に各自で本文の全訳あるいは教科書掲載の問題等を自主的に行って来た学生に対しては、努力点としてさらに評価する。
- ④「解説」の授業では、まず、「予習プリント」の問題の「答え」を、学生に答えさせる。「予習プリント」は主に内容を問う問題中心であるため、構造的に難しい箇所では、構造を問うような「問題」を随時出しながら進めていく。「問題」の「答え」は、予め配っておいた紙（以後、「練習の紙」とする）の方に、全て書くように指示をする。「問題」の「正解」の方は、学生に答えさせた後、すぐ伝え、各自でチェックさせる。この構造問題の方も答えの「正誤」は問わず、眠らないで授業を受けていたかどうかを知る手段として、授業後、「予習プリント」と一緒に提出させる。また、その時、「疑問点の書き出し」を行って来た場合は、「解説」の授業に出席して解決できたかを各自チェックさせる。もし相変わらず疑問点が残る場合は、その旨を明記してから提出させる。
- ⑤本文の「解説」が一通り終わった所で、日を改め（同じ週の違う曜日）、全文の「音読」を行う。本文の各文を、意味の切れ目ごとに比較的細かく区切り、教員の発音の後で「発音練習」させる。その時、区切りごとの意味内容を再度言うことによって、まだ残っている学生の「疑

問点」を解消させる。そのように区切りごとに「発音練習」させ、丁度1文が終わったところで、学生を指名し1文丸ごと発音させる。このようにして、本文全体を発音の面からも確認させる。

3. 今回の試みに対する反省 (学生へのアンケートをもとに)

3. 1. 「予習」について

前回・前々回の試みで、どの予習内容の「項目」に対しても、「役立った」あるいは「時々役立った」と答えている学生が過半数を超えていたことから、やはり今回も予習は必須のものとした。ただ、今回の対象学生から、習熟度別クラス編成となり、しかも担当クラスが下級クラスだったこともあって、今回は初めて、内容を中心に問う問題形式の「予習プリント」を作り、「解説」の授業前に自宅で行わせてみることにした。

「予習プリント」とは、前回、使用したテキスト掲載の「T/F問題」にヒントを得たものである。前回の「T/F問題」は問題も選択肢も全て日本語で記されているものだった。そのため、予習する上でかなり参考になったようで、「内容理解を助けた」、「全訳する時の参考となった」とコメントしている学生が多く見られた。そこで、今回は、本文の1文ごとに日本語で細かく内容を問うような問題形式をした「予習プリント」を作り、行わせてみた。その中では、少し小さめの辞書には載っていきそうな難解な単語等は日本語にして予め載せておく等、極力学生の予習をやりやすくするような配慮をした。

前回以前からも試みさせてきた、「疑問点の書き出し」に関しては、今回も続行させ、何か「疑問点」がある場合は予め書き出して来させた。また、前回まで行わせていた、「全訳」や「要約」あるいは教科書掲載の問題については、やるか、やらないかは学生の意志判断に任せた。ただ、もし自立的に行ってきた場合は、「予習プリント」の答えと一緒に提出させ、併せて評価の対象とした。

前回までは、自宅で行かせた課題の提出期限は、「解説」の授業の始まる前までとしていた。家では何もしないで、授業中に何食わぬ顔で課題を行い提出する学生の出現を避けるためであった。ただ、前回の試みで、「疑問点を(レポートとして)提出してしまうので分からなくなる」といったコメントが見られたこともあり、また、「解説」自体を「予習プリント」中心に行う形にしたこともあって、「予習プリント」及びその他の「予習」課題の提出は「解説」の授業後ということにした。

さて、今回の初めての試みである、「予習プリント」の学生への印象はどうだったのだろうか。結果としては、「理解を深めた」、「大体理解を深めた」という学生が殆ど(59%+38%=97%)を占めた。制作に時間がかかっただけのことはあったようである。ただ、「予習プリント」の必要性について聞いてみたところ「必要」と答える学生は過半数を少し超えた(67%)程度で、「分からない」と答える学生も結構見られ(23%)、「不必要」と言い切っている学生も10%にも及んだ。

今回は下級クラス担当だったこともあって、殆どの学生が「予習プリント」について肯定的なコメントをしていたが、中には「必要でない人もいると思う」、「(自分の力で行いたいの)予習プリントで大体の内容が分かってしまう」というコメントも見られた。必要としている学生も多くいることは事実なのだろうが、ただ、下級クラスと言っても、やはりレベルの差はあ

り「不必要」である学生も存在している。

さらに、「予習には何をやるべきか」を問うてみたところ、「予習プリント」を越えて、従来からの「全訳」が過半数を超えた（59%）。次回からは、この「予習プリント」も、学生の意志に任せて行わせる配慮が必要であるのかもしれない。

<予習プリント> (%)

役立った	59	必要	67
大体役立った	38	不必要	10
役立たなかった	3	分からない	23
分からない	0		

<予習に何をやるべきか> (%) (複数解答可)

全訳	57
予習プリント	36
疑問点の書き出し	36
Warm Up 問題 (教科書掲載問題)	24
T/F 問題 (教科書掲載問題)	21

また、去年と同様に行わせた「疑問点の書き出し」については、前回よりも「役立った」「時々役立った」と答える学生に減少が見られた。ただ、コメントを見てみても、前回と比べて特に変わったものも見られないようである。たまたま、教科書が前回のものよりも易しかった、くらいのことだったのかもしれない。「余り疑問点がなかった」というコメントも見られた。

割合的には減ってしまっても、やはり分からないところを見極め、その解決を試みるということは、どんな勉強にとっても必要な要素であろう。「疑問点の書き出し」は続ける必要がありそうである。学生の意見としても3分の1以上の学生（36%）は「(予習に)やるべき」としている（上記の<予習に何をやるべきか>参照）ようである。

<疑問点の書き出し><前回> (%)

役立った	30
大体役立った	49
役立たなかった	20
分からない	1

<今回> (%)

役立った	21
大体役立った	33
役立たなかった	5
分からない	28

「単語の解説&発音練習」に関しては、前回までも、「必要」としながらも、実際、「発音練習」などをしっかりやっていた学生が多く見られた。また、前回は「予習」段階で単語の「発音チェック」なるものも試みてみたのだが、思った程の反応が得られなかった。また、今回は、「予習プリント」を配布しており、「予習」のケアに関しては、それで十分対応できるものだと判断した。発音に関しては、今回は「予習」の段階ではなく、「復習」の段階で、文章全体を「音読」させるという新たな試みを行ってみた。それについては、3.3.を参照されたい。

3. 2. 単元ごとの「解説」について

今回、大きく変えてみたのは、「解説」自体を、事前に配布しておいた「予習プリント」の問題に答えさせる形で進んでいったという点である。一応、授業内に「予習プリント」の答え合わせ的なことを行うため、今回は「予習プリント」の「正解」のようなものは作らなかった。「予習プリント」は内容を問う問題を中心に構成させているため、「構造」に関しては、前回初の試みであった、授業時間内に、まず「ポイント問題」を与え、それに答えさせ、最後に「正解」を確認させるという形を取った。

考えるように指示しただけでは実行しない学生もいるため、今回も、出された問題の「答え」は全て、予め配っていただいた「練習の紙」の方に書かせ、授業後、提出させた。前回までは授業内に質問した「単語の意味」も、全て問題の「答え」として「練習の紙」の方に書かせていたが、「(単語を書かせることを含めて) 簡単なことまで何回も書かせ過ぎ」等の否定的なコメントも見られたため、今回は「ポイント問題」の答えのみを書かせることにした。今回は、単語に関しては、口頭で確認する程度に留めた。

前回までは、授業を全て終えた後、テストを行うわけでもなかったため、成績をつける上でも、授業内にどれだけ遅れずについて来られたかということに、かなり大きな比重が置かれていた。そのため、授業内では絶え間なく「問題」を出し続けていたこともあったのだが、今回から習熟度別のクラス編成になったこともあり、最後は上級クラスも含めて同じテストで締めくくることがなった。そのため、ある意味、「練習の紙」の意義は去年程のものではなくなった。が、やはり重要な部分だけでも書かせることは意味のあることだと判断し、今年も「練習の紙」方式とした。

その結果、今回も前回と同様、授業内に「ポイント問題」を行うことを評価する学生数が過半数(62%+23%=85%)を超えた。しかし、下級クラスの中でも比較的よくできる学生はいて、やはり問題自体が簡単感じられてか「殆ど分かったからやる意味なし」とコメントしていた学生もいたようである。が、「やって損はなかった」というコメントも見られ、全般的には、このまま続けて良いと言えそうである。

<ポイント問題>	<前回> (%)	<今回> (%)
役立った	56	役立った 62
大体役立った	27	大体役立った 23
役立たなかった	9	役立たなかった 5
分からない	8	分からない 10

今回は前回の意見を踏まえて、「ポイント問題」の数を減らしたものの、「予習プリント」の答え合わせのようなことを授業内に行った結果、やはり授業内に行う活動がそれなりの量となってしまう。そのことも手伝ってか、やはり今回も「もっとゆっくり話してほしい」というコメントが目立ってしまった。話す速度の他に、今回は「話をまとめてから話してほしい」という内容のものも幾つか見られた。確かに自分には余りしっかり考えないまま口に出す所があり、そのことを考えれば、なかなかの鋭い指摘だと感じた。ただ、「言う度に訳が変わるので1つに搾ってほしい」というコメントは気になった。やはりテストを意識して、教員の言う解釈(訳)さえ完璧に写しておけば、という考えが垣間見られ、テストの弊害が感じられた。

今回初めて行うことになったテストは、授業で解説があった文章から出題されることになっていた。そのため、上記のような学生が出てきてしまったように思われる。もしこれが、テキストとは違った文章でテストされたとしたら、今回も見られたように必死になって教員の言う解釈を書き取ろうなどということをする学生も減り、読解におけるもっと本質的なものを理解しようとしてくれたのではないか。テストの出題方法も、一考の余地があるように思われる。

3. 3. 「復習」について

前回は初めて「復習プリント」という形での「復習」の形を取ってみた。「復習プリント」とは、授業内に行った「ポイント問題」の主なものをプリントにして、自宅で再度行わせるというものであった。行かせた後は、「正解」も配り、授業内でも再度確認するなど、結構の手間と時間を要した。が、残念ながら、色々手を掛けてやった割には思った程の結果は得られなかった。

そこで、今回は「復習」の形を大幅に変えてみた。「予習」時に書き出させた「疑問点」の解決を試みさせることを主な「復習」としてみたのだ。ただ、「疑問点の書き出し」を行って来なかった学生もいるため、今回は授業の中で「音読」を行い、その際にもう一度、意味内容も言うことによって、内容的にも「復習」ができるような形を取ってみた。

「疑問点」に関しては、殆どの学生は「解説」の授業で解決させていたようだったが、それでも解決しなかった学生にとっては、「音読」が「疑問点」の再解決の場ともなった。その「音読」タイムを経てもまだ解決しない「疑問点」に対しては、再度「疑問点」として提出してもらい、その際にはコメントを付して返却した。

今回の各自で行う「復習」としての「疑問点」の解決は、果たして学生達にきちんと行われていたのだろうか。幸い、殆どの学生が「行った」、「大体行った」と答えているようである（51%+31%=82%）。コメントによると、中には「友達に聞いた」という学生もいるようであったが、「授業」又は返却課題のコメントで解決したという学生が殆どのものであった。「行わなかった」という学生数（18%）が少し気になるのだが、先の章でも述べた通り、これはどうも「疑問点」がないという学生のものである。「行わなかった」と答えている学生のコメントを見ると、「疑問点がなかった」、「単語が分からなかったくらい」等とコメントされていた。

今回は「予習」課題の提出時を「解説」の授業開始前から授業後としたため、何とか「疑問点」の解決もなされていたようである。疑問点がない場合は、今回は各自では何も復習しないで終わってしまった場合も考えられるが、とりあえず、少なくとも「疑問点」が存在している場合は、何とかその解決が試みられたようであった。

< 疑問点の解決 > (%)

行った	51
大体行った	31
行わなかった	18

では、今回初めての試みである「音読」に対する学生たちの反応はどうだったのであろうか。まず、「音読」そのものについては、「（音読）しやすくなった」、「大体しやすくなった」と答える学生が殆ど（24%+60%=84%）であった。「音読」の必要性について聞いてみても、ほぼ同

数(83%)の学生から「必要」との回答を得た。また、「音読」による「内容理解」についても聞いてみたのだが、過半数の学生(31%+38%=69%)が「深まった」「ほぼ深まった」と答えている。

今回、「音読」は、各文を意味の切れ目ごとに区切り、その区切りごとにクラス全体で教員の後に続き発音練習し、1文終わったところで1人の学生に1文丸ごと発音してもらうという形で行った。区切れを比較的細かく取ったためか、「音読」を評価している学生のコメントの中には、「意味の区切りが分かって良かった」というものが幾つか見られた。また、一回「授業」で内容を説明した後に「音読」を行ったため、「2回聞けてよく分かった」というコメントも見られた。「音読」時には、「音読」の区切れ(つまり意味の切れ目)ごとにもう一度、意味内容(解釈)も言ったのだが、そちらの方も殆どの学生の役に立った(43%+47%=90%)ようである。

<音読><実際> (%)		<必要性> (%)		<内容理解> (%)	
しやすくなった	24	必要	83	深まった	31
ほぼしやすくなった	60	不必要	3	ほぼ深まった	38
変化なし	0	分からない	14	変化なし	29
分からない	16			分からない	2

<音読時の簡単な解釈> (%)

役立った	43
大体役立った	47
役立たなかった	5
分からない	5

高校の時は受験を意識してか、余り発音をしっかりやった経験がない学生が多いようで、「発音分かって良かった」という学生も見られた。また、「体を使って(口を使って音読して)覚えた方が覚えやすい」という学生、さらには「(音読が)楽しい」とか「楽しくできた」とコメントしている学生も見られた。

もちろん、「(音読したいかどうかは)人それぞれだと思う」とか、「(音読が)あってもなくても同じ」という学生も僅かながら存在しているようであるが、上記のことから、初めての試みである「音読」は、これから続けて行くだけの価値があると見て良さそうである。「音読」時に「疑問点」を確認する学生も見られたが、「疑問点がなかった」という学生にとっても、「音読」することで、全体的にざっと本文を見直すこともでき、そういった面から考えても、「音読」の価値は認めて良いと言えそうである。

3. 4. 「自宅課題」の是非について

前回の試みでは、従来のような「テスト」を行う体制の中に、「予・復習」をも「評価」の一環として組み込むのが良いのではないかということ、とりあえずの結論とした。2004年度から、たまたま習熟度別のクラス編成が始まり、上級クラスとの兼ね合いもあり、従来からの「テスト」による評価方法を行わざるを得なくなった。しかし、担当クラスは下級であったこ

ともあって、やはり評価には日々の「予・復習（自宅課題）」も加味してやる必要があるように感じられた。「英語嫌い」の下級クラスの学生であっても、「予・復習」をも評価することで気を引き、物理的に勉強させ、ひいては最終的なテストで少しでも好成绩を上げられれば、というのが目論みである。つまり、従来通りの「テスト」による評価を主とする中で、自宅での「予・復習」をも評価するというのが、今回の形である。

今回の自宅課題は、主に「予習プリント」であった。「復習」としての「疑問点」の解決は、授業内にチェックを済ませていた学生が殆どのものであった。前回までの試みでは、評価が「テスト」であった場合を想定させ、それと「レポート」であった場合とを比べ、「勉強量」や「頻度」等を問うた。が、今回から評価方法が変わり「テスト」の成績が評価の大きな部分を占めるようになったため、今回は「テスト勉強」にかかる時間と「予習プリント」にかかる時間（つまり「勉強量」と、その「頻度」について問うてみることにした。

その結果、やはり、「テスト勉強」より「予習プリント」にかかる時間の方が多いと答える学生が過半数を上回った（59%）。これはやはり、「予習プリント」が必須の自宅課題であったためであろうか。また「頻度」に関しても「予習プリント」を行う頻度の方が高くと答える学生がかなり見られた（77%）。つまり、いくら「テスト」で評価される部分が大きくても、そのために行う自主的な「テスト勉強」の時間の方は、テスト直前のわずかな時間が費やされるだけと言うことができるのかもしれない。この結果からも、「課題」を与えてやる必要性は大いに認められると言って良さそうである。また、自主的にはなかなか勉強できない学生にとっては、この「課題」をこなすこと自体が「テスト勉強」にもなると考えられる。

<勉強量> (%)		<頻度> (%)	
テスト勉強<自宅課題	59	テスト勉強<自宅課題	77
テスト勉強>自宅課題	10	テスト勉強>自宅課題	5
テスト勉強=自宅課題	10	テスト勉強=自宅課題	5
分からない	21	分からない	13

ただ、先にも述べたように、「予習プリント」という課題に関しては「不必要」だと感じている学生も確かに存在しており（3.1.参照）、極端な意見としては「大学生になってまで先生に決められる勉強は不要」というものが見られた。これは、単に勉強したくない口実としても取れるのだが、妙にひっかかる一言でもあった。そこで、「予習」を強制されなかった前期（前期に下級クラスを担当されていた先生は予習を強いられなかった）に、どれぐらいの学生が自主的に「予習」を行って来たかを問うてみた。以下が、その結果である。

<自主的な予習> (%)	
行った	39
時々行った	22
行わなかった	39

これは、思った以上の結果である。「(予習を) 行った」、「時々行った」と答えている学生が、何と過半数を越えている（39%+22%=61%）のだ。もっとも、「行わなかった」と答えている学

生数(39%)も決して無視できる程ではないのだが、でも、この結果より、もう少し学生の自主性を信じてやることも必要であると感じた。

今回の「予習プリント」からも分かるように、確かに「課題」を出して物理的に勉強させることには、それなりの意味はあるように思われる。「やらない」より「やった」方が良いに決まっているからだ。ただ、その「課題」をどのような心構えで取り組むかということも無視できない要素であるのかもしれない。嫌々「課題」を行っていても、余り効果があるとも思えない。他にも専門科目のレポートが多く只でさえ忙しい学生に対して、家での「課題」をさらに増やすというのも酷な話なのかもしれない。

だとしたら、授業内の「解説」の時間を多少でも削って、もっと授業内に各自がしっかり「課題」などに取り組めるような時間を増やすというのはどうであろう。分からない部分などの説明を聞くということも大切なことではあるのだが、受動的に「聞く」というのは、とかく眠くなるものである。授業での「解説」を寝て聞き過ぎて終わってしまうぐらいなら、少なくとも授業内だけでも自主的にしっかり「課題」などに取り組ませる時間を十分取ってやる方が良いのではないか。

今回の取り組みで、「疑問点」がないと言う学生が見られた。もちろん、本当に「疑問点」がないという場合もあったのだろうが、「予習プリント」などの「課題」に余りしっかり取り組んでいなかったからとも考えられないだろうか。真剣に取り組む程、「疑問点」も出てくるというものだ。先述のように、「英語嫌い」に強制的に行わなくてはならないような「課題」を与えてやることは間違いなく意味のあることである。でも、その与え方そのものにも考慮の余地があるのかもしれない。

4. 終わりに

今回の取り組みは、前回までの試みとは大きく異なり、従来の「テスト」による評価が大きな部分を占めた。また、前回までと同様、自宅で行わせる「予習プリント」の提出状況なども評価の中に絡めることで、学生に継続的な勉強を行わせようとした(3.1.参照)。

「予習プリント」とは今回初の試みであり、具体的には、自宅での「予習」が少しでもやりやすいものとなるような手助け手段である。学生には毎週その「予習プリント」を自宅で必ず行わせ、さらに授業内での「解説」も、その「予習プリント」を中心に進めていった。「予習プリント」は意味内容中心の問題で構成されているため、構造に関しては、授業内に「ポイント問題」として新たな問題を与え、答えの確認も行った(3.2.参照)。

前回、今一つの結果であった「復習プリント」を今回は止め、「復習」としては、「予習」の段階で「疑問点」が出た場合は、その「疑問点」の解決を試みさせた。また、「疑問点」がなかった場合でも、今回新たな試みである「音読」活動を通して全体的な「復習」ができるような形をとってみた(3.3.参照)。

今回初の試みである「予習プリント」は前回の「復習プリント」よりは、それなりに学生達の役に立ってくれたようである。ただ、今回の試みで少し問題を感じたのは、今まで良かれと思ってし続けてきた「自宅課題」の是非である。これまでは、やる側の学生がどう思おうが感じようが、とにかく物理的に勉強させれば良い、くらいのことしか頭になかった。ところが、「(大学生になってまで)自宅での強制課題はおかしい」というような学生の一声をきっかけに、また、

実際、強制されなくても結構な数の学生達には「予習」をやろうという意志が備わっていることが分かったこともあり、授業内にもっと学生達が積極的に参加できるような形をとった方が効果的であるのではないかという気がしてきた。

そう思わせた要因の1つが、これもまた今回初の試みである「音読」活動である。大学生ともなると、授業中にほとんど声を出さないことは前回までの試みでも明らかであった。でも、授業内に声を出さなかったら、一体、どこで英語を口にするというのか。そこで、前回までの「単語」のみの「発音練習」を少し発展させ、1文を極力細かく分けた意味のまとまりごとの「音読練習」を試みさせてみた。声を出すことにより眠気覚ましにもなり、また実際、楽しんで行っている学生も多く見られたようだった。

この「音読」活動に対して、「体」を使う（口を使って声を出す）と良く頭に入ると言った学生がいた。また、前回から授業内に行わせている「ポイント問題」も比較的好評であることから、自宅での課題を強制的に行わせるということより、授業内に「体」の一部でもある「頭」をもっと使ってできるような課題を与えてやる方が良いのではないかと思い始めたわけである（3.4.参照）。

授業内の活動ということであれば学生の「課題」に対する拒否反応も、多少なりとも小さいのではないだろうか。やはり同じ課題をこなすにしても、どのような心構えで行うかということも、大きな要素と言えるだろう。

最初は物理的な「勉強量」を増やすことしか頭になかったこの試みであるが、次回からはもう少し学生側の立場からも考え、もっと学生が積極的に参加できるような、且つ、もっと効果を上げることができるような授業形態について、さらに追求していきたい。